

海士町創生総合戦略

人口ビジョン

《海士チャレンジプラン》

平成27年10月30日

海士町

はじめに

海士町では、『このままでは無人島になってしまう』との強い危機感のもと、『ないものはない』の精神で、地域課題を地域資源と捉え、島の自立に向けた多くの挑戦を続けてきた。その挑戦する姿が島の魅力となって多くの交流を生み、更なる挑戦へと繋がっている。

このような輝きの連鎖を未来の子ども達に繋いでいくためには、次世代が中心となり、限りなき挑戦を続けていくことが必要である。

総合戦略の策定にあたり、海士町は、住民・役場職員の若手有志による「明日の海士をつくる会」を設置した。明日の海士をつくる会では、分野や業種の壁を越えた議論を重ねる中で、まちづくり全体の関係性の理解を深めながら、理想の好循環を創り出すためのまちづくりのあり方を考えた。

そして、2050年の理想の海士の姿を描き、実現のための方向性や取組を示した提言「あすあまチャレンジプラン」をまとめた。この提言には、次世代を担う住民・役場職員が同プランに基づき自らまちづくりに挑戦していくという宣言の意味も込められている。

海士町は、「あすあまチャレンジプラン」に基づき、次世代のまちづくりに対する挑戦への機運を取り入れ、輝きの連鎖を住民との共創により『意志ある明るい未来』へと繋いでいくための「海士町創生総合戦略・人口ビジョン(海士チャレンジプラン)」を策定した。

1. 理想の海士の姿

第四次海士町総合振興計画において、海士町の将来像を「心が満たされる島」「手づくりのある島」「幸せを実感できる島」「美しい風景を残す島」と示している。

今回の海士チャレンジプランでは、明日の海士をつくる会の提言に基づき、総合振興計画に掲げる4つの理念を土台に下記のとおり具体化した。

魅力ある伝統文化や自然豊かな暮らしの中で、誰もが生き生きと活躍できる島

地域ぐるみで見守り、子どもから高齢者まで笑顔あふれる島

島内外の交流を通じて地域の魅力づくりに挑戦する人が集まる島

グローバルな未来の担い手(地域と世界のつなぎ手)を輩出する魅力ある教育の島

海士の地域資源や人材を活用した経済活動で自立している島

自立した経済活動により田園・漁村の風景を守りつつ、新たな文化を創り上げる島

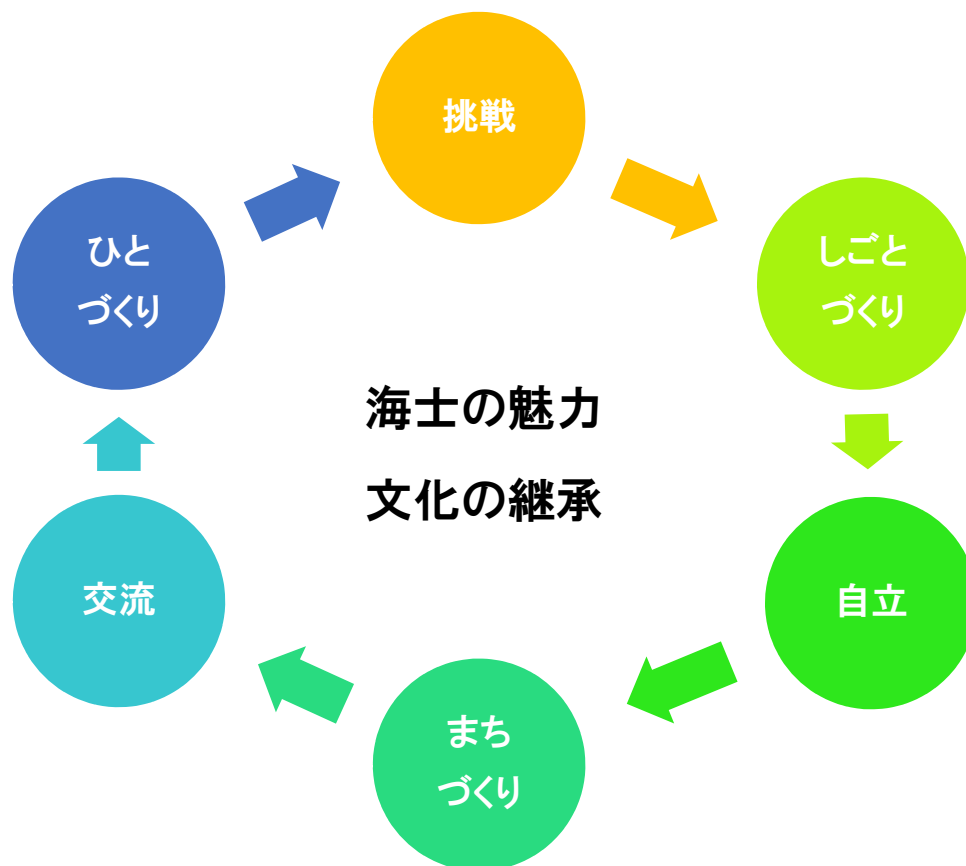
2. 基本目標

理想の海士を実現するためには、町の経営指針でもあり、住民に広く浸透している「自立・挑戦・交流」と「まちづくり」「ひとづくり」「しごとづくり」の相互のつながりを大切にしながら施策を進めていくことが必要である。

そこで、理想の海士(目的)を実現するための基本目標を下記のとおり定め、この目標の達成に向けて、平成31年までの5年間、集中して創生戦略に取り組む。

- だれもが地域に愛着を持ち、生き生きと暮らせる交流盛んなまちづくり
- 魅力ある海士をつくるために挑戦するひとづくり
- 地域の資源を生かし自立を目指すしごとづくり

挑戦し続けることで、海士の魅力を活かしたしごとを創り、自立を目指す
 自立することにより、文化を継承するまちを創り、交流を広げていく
 交流の中でひとを創り、更なる挑戦を続ける



3. 数値目標

海士チャレンジプランでは、3つの基本目標が互いに好循環を生み出すことで達成される数値目標を下記のとおり定める。

★ 0歳児から18歳の子どもの数	376人(2015) → 412人(2020)
★ 転入者－転出者(社会移動)	5年間で88人以上
★ 介護を要しない高齢者の割合	80%以上を維持 (2015年85.3%)
★ 一次産業の新規従事者	5年間で20人以上
★ 海士町幸福度	5年後に現状より上昇
★ レジリエンス(しなやかな強さ)指数	5年後に現状より上昇

※ 海士町幸福度及びレジリエンス指数(食料やエネルギー自給率・外部依存率等から算出)については、調査方法等を含め検討中

4. 創生戦略

(1) だれもが地域に愛着を持ち、生き生きと暮らせる交流盛んなまちづくり

《目指す島の姿》

魅力ある伝統文化や自然豊かな暮らしの中で、誰もが生き生きと活躍できる島
地域ぐるみで見守り、子どもから高齢者まで笑顔あふれる島

【現状と課題】

- 普段の暮らしの中では、地域や職場を超えた住民同士の交流が少なく、人間関係も偏りがちになり、年代や性別、Uターン、障がいの有無を超えたつながりの妨げになっている。
- 社会環境やライフスタイルの変化により、豊かな自然の中、地域ぐるみで行う多様な子育てや介護の場が減ってきている。
- 生涯現役社会を実現する上で不可欠である福祉専門職の確保や福祉施設の整備が不十分である。
- 移住者は増えつつあるが、島には民間の不動産市場がないために、空き家や空き地があるにも関わらず、町営住宅に需要が集中し、供給が追いつかない状況である。また、土地の風土や環境を活かす家づくりの職人の技術も育ちにくい。
- 離島であるため、廃棄物や海岸漂着物の処理費用の負担が大きく、処理が追いついていないことから、まちの景観を損ねている。
- 既存の公共施設等の老朽化により、台風や地震などの災害等に対して不安を抱えている。



【具体的な施策】

(ア) 年齢や性別、障がいの有無に関わらず誰もが暮らしやすく活躍できるまちづくり

- ① 祭りなどの伝統行事やスポーツ・音楽などのイベントなどの開催、**古民家を活用した交流・合宿所の整備**を行うことで、島内外の多様な交流を進めていくとともに、地域や職種、年代、性別、障がいの有無を超えたつながりを深める。
- ② あまマーレなどの島内交流施設の活用や子どもが自然体験できる**森のようちえん構想**など、保育園との連携を図りながら地域や自然の中で子育てできる環境をつくり、出産・子育て等における経済面での負担軽減にも、引き続き取り組むことで、笑顔溢れる親子を増やす。
- ③ 買い物支援の充実や集落介護員の設置など、地域の見守り活動を充実していくことにより、高齢者や障がい者、子育て中の人、どの集落でも生き生きと暮らし続けられる仕組みをつくる。
- ④ 認知症対策や糖尿病対策などの保健予防事業や健康づくり事業の充実を図るとともに、福祉人材の確保や**福祉魅力化コーディネーターの配置**、スキルアップの研修や交流体験を充実させることにより、福祉の機能・サービスを拡充していく。
- ⑤ 「しゃん山」などの地元農産品販売所、「さくらの家」などの障がい者施設での活動の充実を図り、自立と生きがいを感じられる仕組みを広げていくことで、高齢者や障がい者の心身の健康をサポートする。

重要業績評価指標(KPI)

★5年間の出生数	74人(2010~14) → 85人(2015~19)
★あまマーレ、森のようちえん(自然村)でのイベント数	年間200件以上(2015年100件)
★福祉の人材確保数	5年間で35人以上
★福祉系の学生・専門学校生のインターン受入れ数	12人(2014) → 24人(2020)

(イ) 魅力ある自然と景観の中、安心安全で愛着の持てるまちづくり

- ① **町営住宅の払い下げの拡充や不動産市場の創生**、海士の風土や住民の意向を取り入れた家づくりの推進などにより、愛着の持てる終の棲家を増やす。
- ② これまで海士町で行われてきた半農半漁の暮らしを大切にしつつ、新たな一次産業への取り組みのための生産基盤を整備することにより、魅力ある農村漁村の原風景を守る。
- ③ 廃棄物の抑制や再資源化など地球環境に配慮した取組を進める。また、海岸漂着物処理や山林間伐等を行いながら、自然の景観維持にも取り組んでいく。
- ④ 台風や高潮、地震や津波などの自然災害にしなやかに対応できる生活基盤整備や既存施設の修繕等を、景観に配慮しながら着実に実施していく。

★払い下げの町営住宅の数	2020年までに10棟
★耕作農地の面積	158ha(2015) → 165ha(2020)
★耐震岸壁の整備率※	0%(2015) → 100%(2020)

※ 海士町地域防災計画に位置付けられている防災拠点港の耐震岸壁

(2) 魅力ある海士をつくるために挑戦するひとづくり

《目指す島の姿》

島内外の交流を通じて地域の魅力づくりに挑戦する人が集まる島
グローバルな未来の担い手を輩出する魅力ある教育の島

【現状と課題】

- かつての青年団活動のように、楽しい共通体験や、愛郷心・危機感といった想いを住民同士が共有する場が年々減っており、地域課題に挑戦するために必要な仲間づくりが難しくなっている。
- 地域課題に挑戦しようとしている住民や意欲あるUターン者、将来島に戻ってくる子ども達が、海士町で創業・継業しようとしたときの受け皿やサポート体制、マッチング機能が十分機能していない。
- 海士で新しい挑戦を始めたいと考えている島外の挑戦者が、島内の挑戦者や地域資源との交わりの中で、その力を発揮できる舞台が十分に整っていない。
- まちづくり・しごとづくりにイノベーション(新たな価値の創造)を生み出す島外交流について、海外交流を含め、もっと積極的に増やしていく必要がある。
- 一次産業や観光、福祉人材の高齢化が進んでおり、後継者不足は深刻な問題である。また、社会構造の変化により従来のビジネスモデルが成り立たなくなっており、既存の価値観にとらわれない新たな担い手が必要となっている。
- 島前高校の魅力化を島前地域全体へと広げていくためには、保高連携(縦の繋がり)や学校・地域の連携(横の繋がり)がまだまだ不十分である。



【具体的な施策】

(ア)住民同士の交流・共創を通じたひとづくり

- ① 海士町中央公民館や学習センター等の交流施設の活用や、**チャレンジセンター(まちづくりワークショップや創業・継業支援などの機能)の創設**により、楽しい共通体験や愛郷心・危機感を共有できる場、お互いを高め合う学びの場をつくる。
- ② 意欲ある住民の新たな挑戦をサポートする体制や、**身近な課題と小さな挑戦とをマッチングさせる機会(まちづくりカフェなど)**、小さな成功体験の実現から次の挑戦へと繋げていく仕組みをつくる。
- ③ 海士町中央図書館における**郷土史コーナーの新設や郷土史資料のデジタル化**、学校図書館との更なる連携強化による情報拠点化を進めるなど、地域に根付いた社会教育の充実を図ることにより、豊かな暮らしの継承ができる人材を育てる。

重要業績評価指標(KPI)

- | | |
|-------------------------|------------|
| ★まちづくりワークショップ・カフェ等の数 | 年間12回以上の開催 |
| ★上記により、実際に動き出したプロジェクトの数 | 5年間で10件以上 |

(イ) 島内外の人同士の交流・共創を通じたひとづくり

- ① 意欲ある学生や若者、出郷者等を、研修・インターン制度を活用しながら受け入れ、地域とともに挑戦する場づくりを進めるとともに、ICT等の新たな技術を活用しながら一次産業や観光、福祉などの既存の価値観にとらわれない新たなビジネスモデルを構築する。
- ② 海士町のまちづくりを学ぶ企業研修や**海士人間力大学の創設**により、島外の挑戦者が海士を舞台に新しい挑戦を生み出す環境をつくる。
- ③ 海外を含む島外との交流を増やすための仕組み(**独立行政法人国際協力機構(JICA)や隠岐世界ジオパーク推進協議会との連携**など)をつくり、多様な異文化交流の中から、共創によるイノベーション(新たな価値の創造)を起こす環境をつくる。

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| ★大学生・企業・外国人の研修・インターンの受け入れ件数 | 20件(2014) → 30件(2020) |
| ★島外で実施される海士関係のイベント数 | 年間10件以上 |

(ウ)教育魅力化によるグローバルなひとづくり

- ① 学校と地域・家庭との連携を深め、特色ある学校教育を推進していくための**教育魅力化コーディネーターの小中高校への配置**を進めていく。
- ② 島前地域全体での保高連携による教育の魅力化及び教育のブランド化を進めていくことで、島前高校の島留学を引き続き推進していくとともに、**小中学校生の島留学・教育移住の受け入れ**に向けての体験事業等を実施する。
- ③ ICTの活用や島内外からの出前授業、島外・海外への研修・修学旅行などによる豊かな交流を通じて、ふるさとに愛着の持てるグローバル人材の育成を行うとともに、標準規模の発想にとらわれない新しい小さな学校のあり方を構築する。

- | | |
|----------------|-----------------------|
| ★小中学生の教育移住の世帯数 | 2世帯(2015) → 5世帯(2020) |
|----------------|-----------------------|

(3) 地域の資源を生かし自立を目指すしごとづくり

《目指す島の姿》

海士の地域資源や人材を活用した経済活動で自立している島
自立した経済活動により田園・漁村の風景を守りつつ、新たな文化を創り上げる島

【現状と課題】

- 隠岐神社に代表されるような観光名所の魅力発信や海士の魅力である人との交流が十分にできていないことから、リピーターや長期滞在の観光客の獲得に繋がっていない。
- 地元産品の地消率や利益率はまだまだ低く、小魚や傷のある野菜などのいわゆるハネモノ食材も未利用のままとなっている。生産者や住民の間で地元産品に対する価値観が固定化されており、付加価値を高めようという機運に繋がっていない。
- 農林畜産業や漁業等の一次産業従者の高齢化や担い手不足により、これまで継承されてきた魅力ある海士の食文化や農村・漁村の原風景が喪失してしまう恐れがある。
- 離島が抱える輸送コストのハンディや、米価・魚価の低下、漁獲量の低迷などの影響により、農家や漁師の収入は不安定であり、一次産業の新規就労者を呼び込むほどの基盤が確立できていない。
- 木材の活用がなく間伐も十分にされていないため、スギなどの放置林が増加し、山林の荒廃が進んでいる。
- エネルギー資源として活用可能な廃材や間伐材、公共事業による伐採材などが未利用のまま放置され、増え続けている。
- 島内事業者の有する資格・免許(建築士等)の種別・数が不足していることなどから、公共事業の発注が必要以上に島外へ流出している。



豊かな里山・里海の風景



定置網



廃材・伐採材



荒れた山林・耕作放棄地



【具体的な施策】

(ア)地域の観光資源を活用したしごとづくり

- ① **隠岐神社周辺をリノベーション**(新たな価値の発見)し、新たな魅力の提供や交流を通じたにぎわいづくりを行うことで、観光客の滞在時間を増やすとともに、リピーター率の向上を図る。
- ② 島外の料理学校と地元生産者との連携による**島食の寺子屋プロジェクト**などの取組を進め、人材育成と集落の賑わいの創出を図るとともに、島の食材にこだわった後鳥羽御膳などの新たなご当地料理の普及による観光の魅力化を図っていく。
- ③ 全国の離島と連携し、海士町の食材・食文化を「**離島キッチン**」として**都内で売り出していく**ことで、離島の強みを生かした新たな情報発信拠点を創出し、外貨獲得と観光客誘致を図る。
- ④ **隠岐世界ジオパークの拠点施設を整備**し、隠岐独自の自然文化の価値や魅力を世界に向けて分かりやすく発信していくとともに、訪れた観光客の満足度を高める。

重要業績評価指標(KPI)

★観光客のリピーター率	毎年度上昇させていく ※ 調査方法等検討中
★海士町観光協会の取扱い宿泊数	3,000泊(2014) → 10,000泊(2020)

(イ)地域の食材や食文化、未利用資源を活用したしごとづくり

- ① **活用しきれない海土産食材の加工品開発やレシピ化**、多様な販売方法を構築しながら、町内の飲食店や宿泊施設、各家庭での利用促進に繋げるとともに、福祉施設や高校、寮などの施設への普及を進めることにより、地産地消率の向上と海士の食文化の魅力化を図る。
- ② **海士のブランド米の開発**や、隠岐牛・崎みかんなどの農林畜産物の生産方法・ブランド戦略の確立、加工品開発による6次産業化と販路拡大を行うことで外貨獲得を図る。
- ③ 漁協や地元企業と連携し、水産資源の漁獲や養殖、鮮度保持の新技术の取得や輸送コスト削減の支援など、**浜の活力再生プラン**に掲げる事業を実行しながら、**CAS施設の強化や食品衛生の国際規格取得**による海外展開も含めた販路拡大・所得向上の取組を推進する。
- ④ 廃材や間伐材、公共事業による伐採材などを活用して、住宅建材やエネルギーとしての利用を促す(**未利用木材を燃料とした木質ボイラーの新規導入やハウス栽培の実証実験**)。

★ブランド米作付面積	5年間で10ha
★農林水産物の新規加工商品開発数	5年間で20品目
★隠岐牛出荷頭数	162頭(2014) → 288頭(2020)
★水産業の売上	432百万円(2014) → 454百万円(2020)
★木質ボイラーの新規導入数	0ヶ所(2014) → 2ヶ所(2020)

(ウ)地域の企業や人材を活用したしごとづくり

- ① **建築関係の免許などの資格取得を支援**するなど、人材育成と地元企業力を高める取り組みにより、島内の企業間の連携や共同事業を増やすことで、島内調達率を高める。
- ② 海士町の地域通貨「ハーン」の活用を促進することで、地域内経済循環を高める。

★建設業登録をしている島内の建築事業者数	2業者(2015) → 5業者(2020)
----------------------	-----------------------

5. 人口ビジョン

国立社会保障・人口問題研究所によると、海士町は 2040 年に下記のような人口動態となることが予想されている(2010 年時点)。

	2010 年国勢調査	2040 年の推計
総人口	2,374 人	1,416 人
生まれる子どもの数	11 人	8 人
生産年齢人口	1,201 人	624 人
高齢化率	39%	46%

このような予測が現実になった時の結果として、今の海士町の活力の維持は困難となり、次のようなことが引き起こされると予想される。

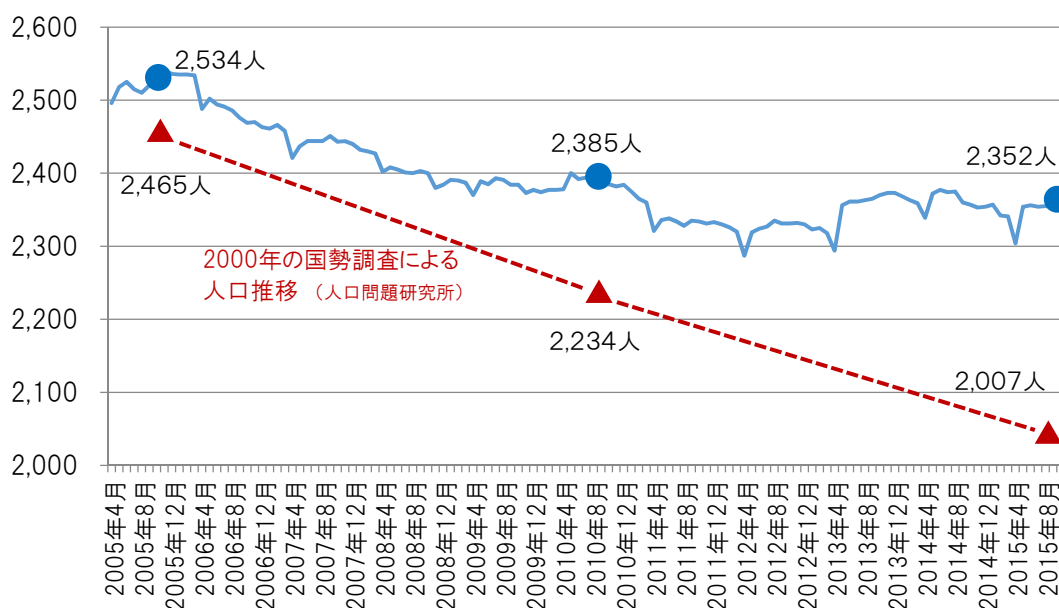
- 現在2校ある小学校は1校に統合
- 地元生徒数の減少により、これまでの魅力化プロジェクトの甲斐もなく、隠岐島前高校は廃校
- 高校の廃校に伴い、生徒だけでなく家族ごとの転出が増加し、家族連れのUターンが減少
- 高齢者を支える生産年齢人口の不足による高齢者福祉の崩壊
- 人口減少に伴う行政サービスの低下
- 祭りなどの地域行事や伝統文化の衰退

なりゆきのままでは、なだれ現象によりすべてが崩壊する暗い未来が待ち受けている。しかし、海士町はこれまでも、なりゆきの未来を変えてきた。

2000 年時点の人口問題研究所の予測では、現在(2015 年)の総人口は 2,007 人(高齢化率 44%)となっていたが、実際(2015 年 9 月現在)には 2,352 人(高齢化率 39%)という明るい未来を実現することができている。

今後またゆまぬ努力と挑戦により、なりゆきの未来を変えることは可能である。

住民基本台帳における人口の推移



「魅力ある海土のために挑戦するひとづくり」を行い、「だれもが地域に愛着を持ち、生き生きと暮らせる交流盛んなまちづくり」や、「地域の資源を生かし自立を目指すしごとづくり」を実施することで、

① 合計特殊出生率は将来的に 2.0(2005-2010 年の平均は 1.76)

※ 2020 年までの 5 年間は現状の出生数(17 人/年)を維持する。その後 2040 年に向けて 年間 20 人を超える出生数を目指す

② 転出率は 3.0%

※ 現状 70 名程度の転出者(高校生を除く)を 50 名程度に減らす

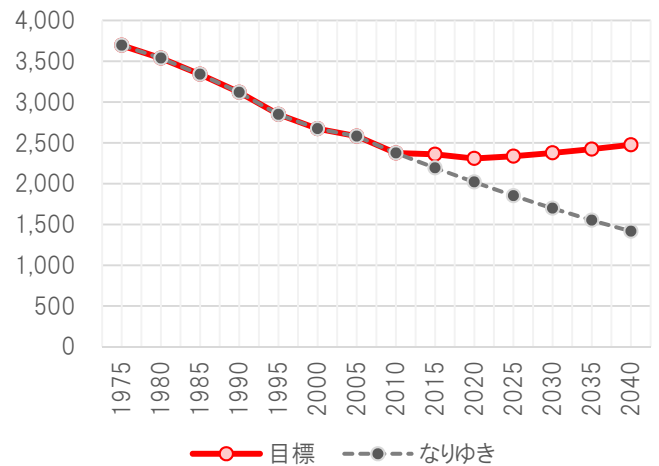
③ Uターンをこれまでと同様に年間 100 人程度(2011~2014 年 平均 139 人)

となることが期待される。

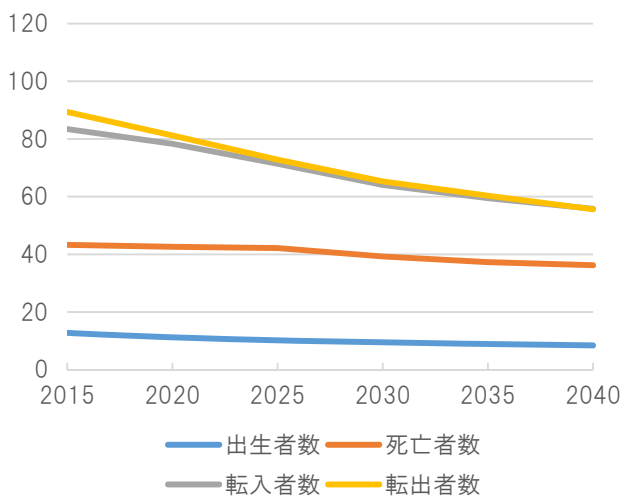
これにより、2040 年の海土町の総人口は 2,475 人となる。これは、国立社会保障・人口問題研究所の総人口の推計値(2010 年の国勢調査のデータがベース)1,416 人と比べて、1,059 人増加である。人口構成もバランスがよくなり、高齢化率も 33%まで改善することが可能となる。(現状: 高齢化率 39%(2015 年)。

総人口

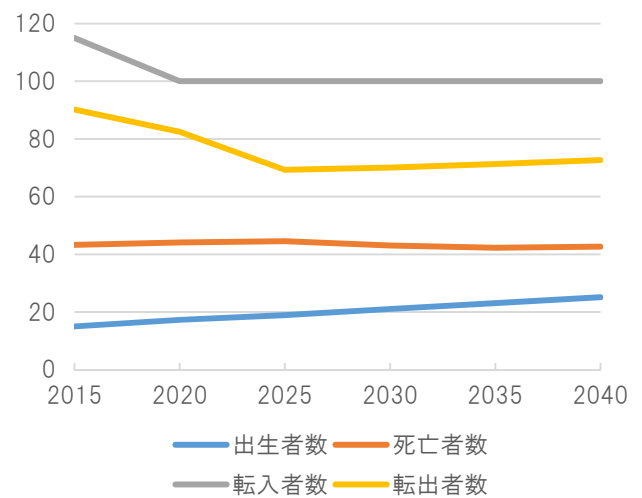
	2010 年 国勢調査	2040 年 なりゆき	2040 年 目標
総人口	2,374 人	1,416 人	2,475 人
生まれる 子どもの数	11 人	8 人	25 人
生産年齢 人口	1,201 人	624 人	1,309 人
高齢化率	39%	46%	33%



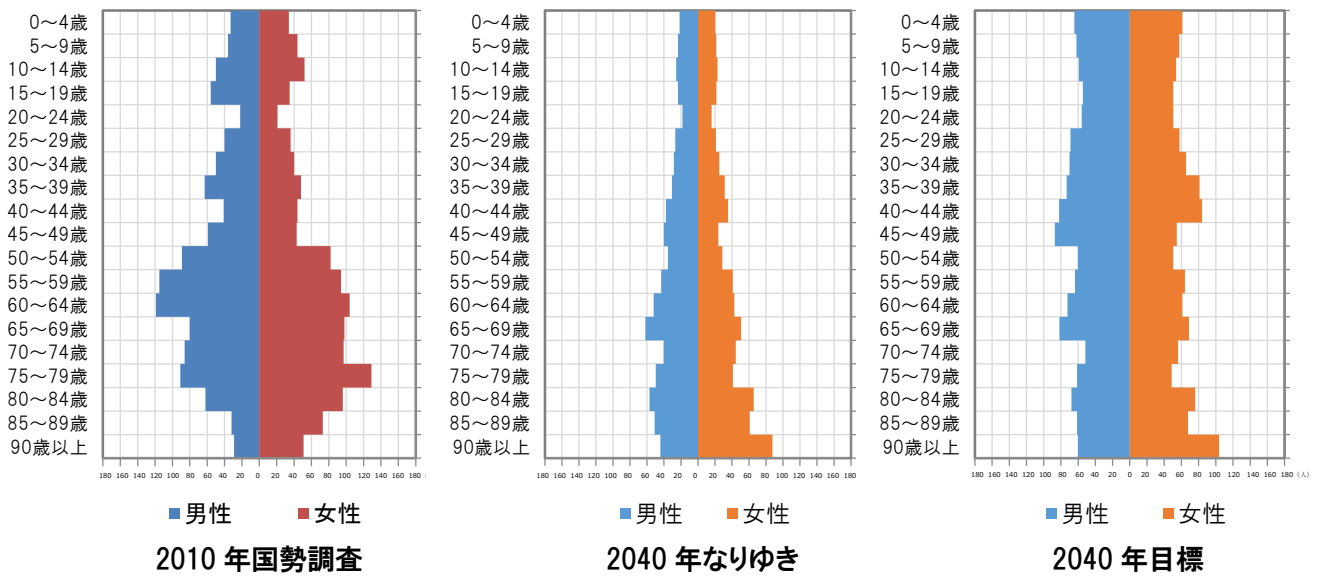
自然増減・社会増減の状況(年間平均)



なりゆき



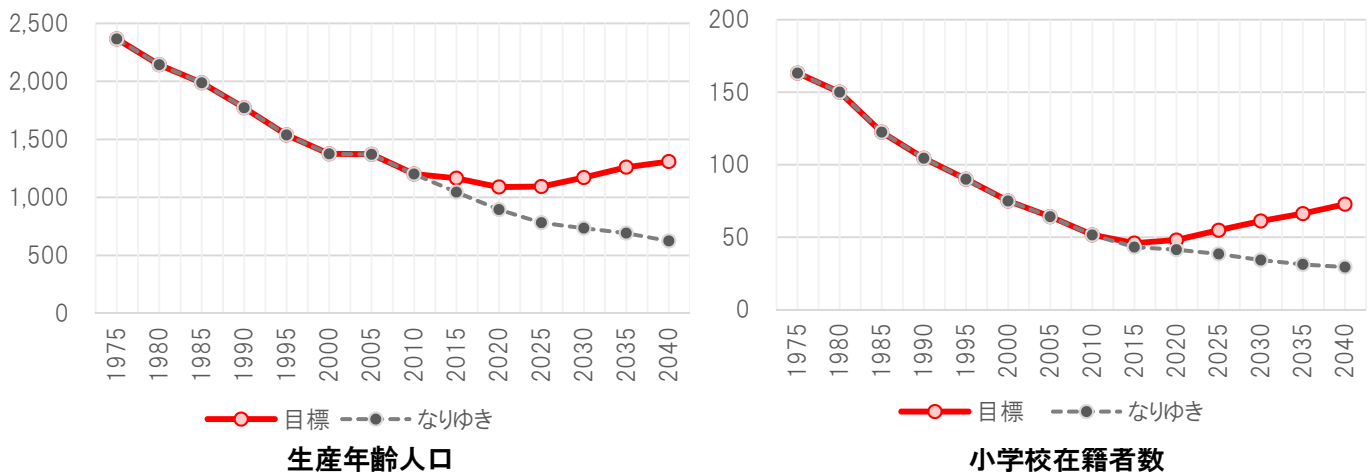
目標



この人口ビジョンの達成により、生産年齢人口も2010年推計値624人と比べて1,309人と、減少を止めることができ、活力ある海士町を維持することができる。それにより、海士町の各集落での多様な祭りや行事などの伝統文化を維持・継承していくことが可能となる。

また、年間に誕生する子どもの数は25人となり、小学校は現行の2校体制の維持ができ、未来の子どもたちに豊かで魅力的な教育環境を提供できる。

高齢化率も33%まで下がり、生産年齢人口や子どもの増加により、高齢化社会を乗り越えた先にある、新たな社会モデルを築くことができる。なによりも、生産年齢人口や子どもの数が増加傾向にあることで、未来に希望を持ち続けられる島になる。



そして、海士チャレンジプランをPDCAサイクルの元、確実に推進していくことにより、2020年(次回の国勢調査)における総人口が2,300人を超えるよう、挑戦を続ける。

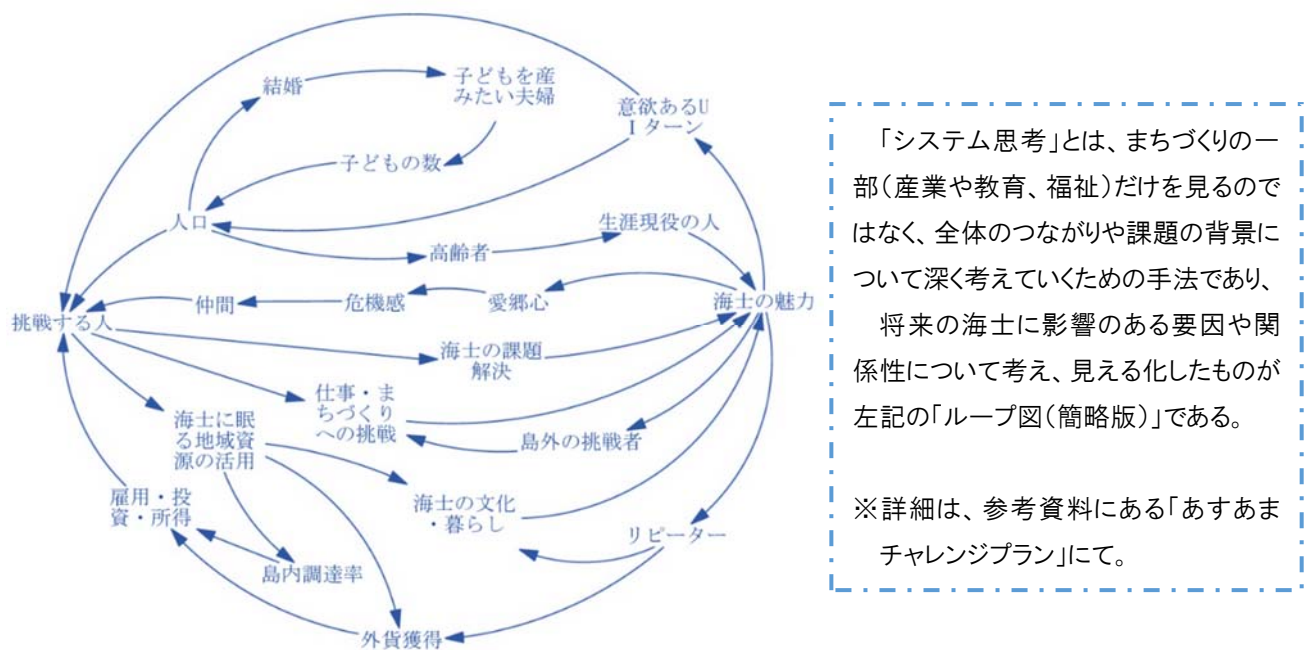
おわりに

海士町では、2004年から独自の「海士町自立促進プラン」に基づいた攻めと守りの行財政改革を行うことにより、いわゆる地財ショックと呼ばれる地方交付税の大幅削減による財政破綻の危機を乗り越え、それまで続いてきた少子高齢化による人口減少も食い止めることもできた。

この取組は、地財ショックや少子高齢化という大きな向かい風の中でも、町民が一体となって「やる気」と「本気」を出して舟を漕げば前に進むことができ、「成り行き」の暗い未来という渦潮から抜け出して、「意志ある明るい未来」に進路を変えられることを示した。

しかし、このことに安堵して舟を漕ぐことを止めれば、その瞬間から「成り行き」の暗い未来という渦潮に飲み込まれることになるであろう。現在は、地方創生という追い風が吹いているかもしれないが、「成り行き」の暗い未来という渦潮は常に進路を阻み続け、舟を引き込もうとしている。

今回の「海士チャレンジプラン」は、住民・役場職員の若手有志による「明日の海士をつくる会」の提言に基づき策定されたものである。明日の海士をつくる会では、膝を突き合わせながら多くの対話を重ねることで、海士町の「意志ある明るい未来」をシステム思考という新たな手法に挑戦しながら描いており、住民・行政の共創によってつくられた「ループ図」が今回の総合戦略の進むべき方向性を示す羅針盤となっている。

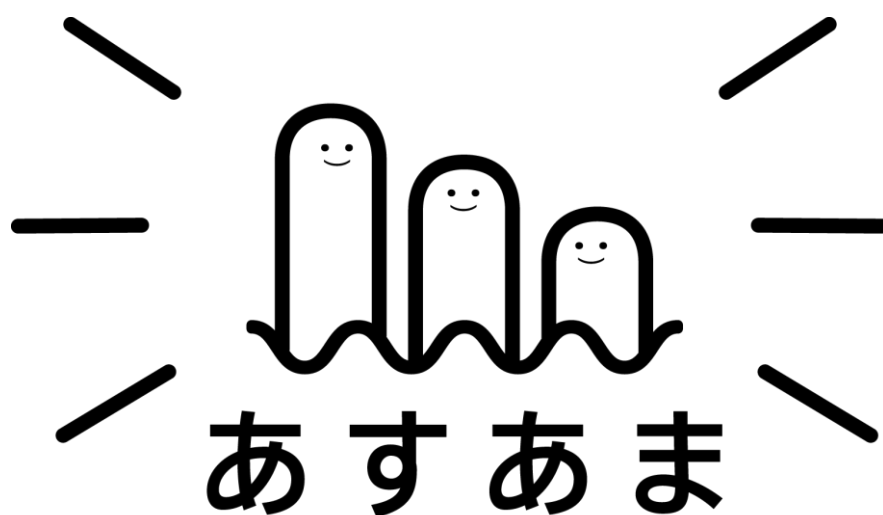


「計画づくりは人づくり」である。総合戦略を策定する過程で、明日の海士をつくる会のメンバーは、まちづくりを他人事ではなく自分事として捉えるようになっていった。明日の海士をつくる会にとどまらず、色々なところで次世代を担う若者が、より良い明日の海士を創るための挑戦を始めている。このような次世代の動きが町全体へと広がっていくことで、これまで同様に「意志ある明るい未来」に向けて、舟を漕ぎ進めることができると確信している。

まちづくりの船の漕ぎ手は町民一人ひとりである。それぞれが「やる気」と「本気」をもち、弛まぬ挑戦による「輝きの連鎖」を続けていくことが、どんな波風や渦潮にも負けない海士町の強い推進力を生み出していく。

參考資料

あすあま チャレンジプラン

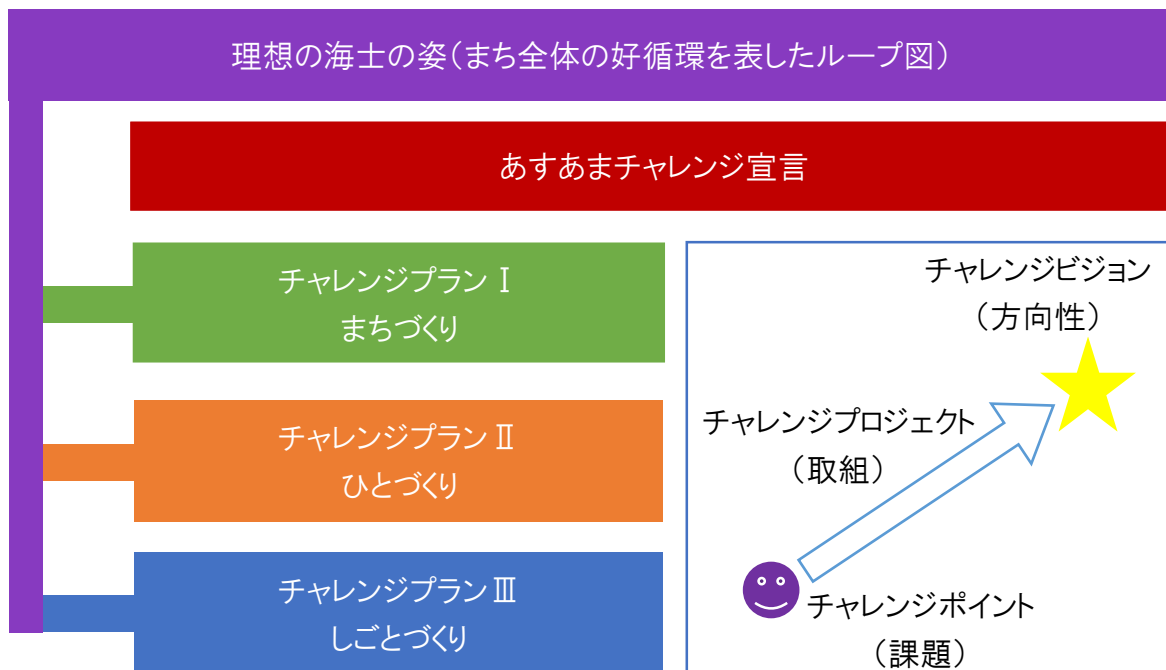


平成27年9月27日

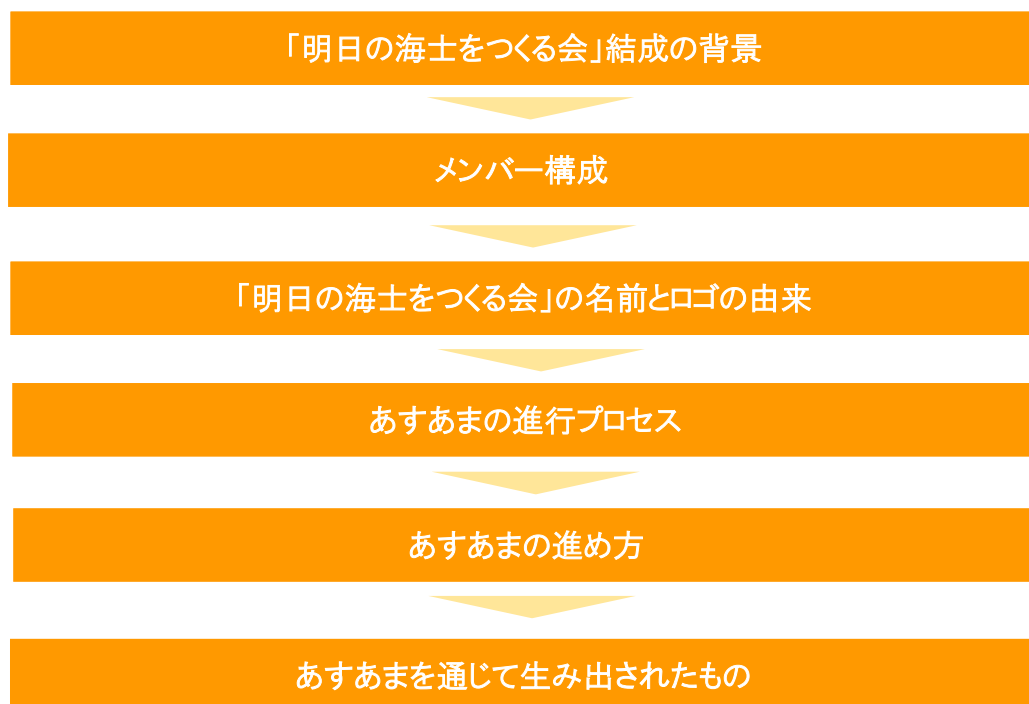
明日の海士をつくる会

あすあまチャレンジマップ（目次）

あすあまチャレンジプラン



あすあまチャレンジへの道



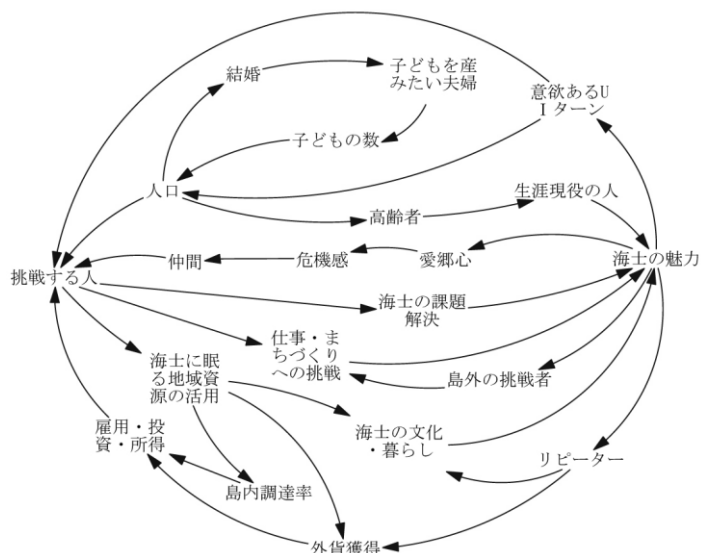
あすあまチャレンジ宣言

海士町では、『このままでは島がなくなってしまう』との強い危機感のもと、地域課題を地域資源と捉え、島の自立に向けた多くの挑戦を続けてきた。その挑戦する姿が島の魅力となって多くの交流を生み、更なる挑戦へと繋がっている。このような現在の輝きの連鎖を、未来の子ども達に繋いでいくためには、次世代が中心となって、更なる挑戦を続けていくことが必要である。

これまでの海士町のまちづくりでは、海士に眠る地域資源の活用→外貨獲得→新たな雇用→次の挑戦というCASの取組や、教育の魅力化→地域課題に挑戦する人材の育成→島前地域の魅力アップという島前高校の取組などで、好循環を生み出してきた。

住民・役場職員の若手有志により結成された「明日の海士をつくる会」(以下「あすあま」という)は、分野や業種の壁を越えて、まちづくり全体の関係性を理解しながら、これまで海士町がやってきたような好循環から輝きの連鎖を創り出すための議論を重ね、理想の海士の好循環をループ図で描いた。

理想の海士のループ図（簡略版）



「挑戦する人→海士の課題解決→海士の魅力→意欲あるUターン→挑戦する人」の場合、
 「挑戦する人が増えると、海士の課題解決が増え、海士の魅力が高まることにより、意欲あるUターンが増えることで、更なる挑戦する人が増える」となる。

理想の海士の好循環を実現することにより、「魅力ある海士の伝統文化や暮らしの中で、誰もが活躍できる島」「地域ぐるみで子育てをして、子どもからお年寄りまで笑顔あふれる島」「交流を通じて地域の魅力づくりに挑戦する人が集まる島」「グローバルな未来の担い手を輩出する魅力ある教育の島」「海士の地域資源や人材を活用した経済活動で自立している島」「自立した経済活動により田園・漁村の風景や伝統文化が守られている島」を未来の子どもたちに継承していく。そのために、

私たちは、想いや危機感、迷いを分かち合う仲間とともに、島内外の交流を通じて多様な価値観や気づきを得ながら、誰もが生き生きと暮らせる自立した海士の未来をつくり上げていくため、変化をおそれず自ら挑戦を続けていくことを宣言する。

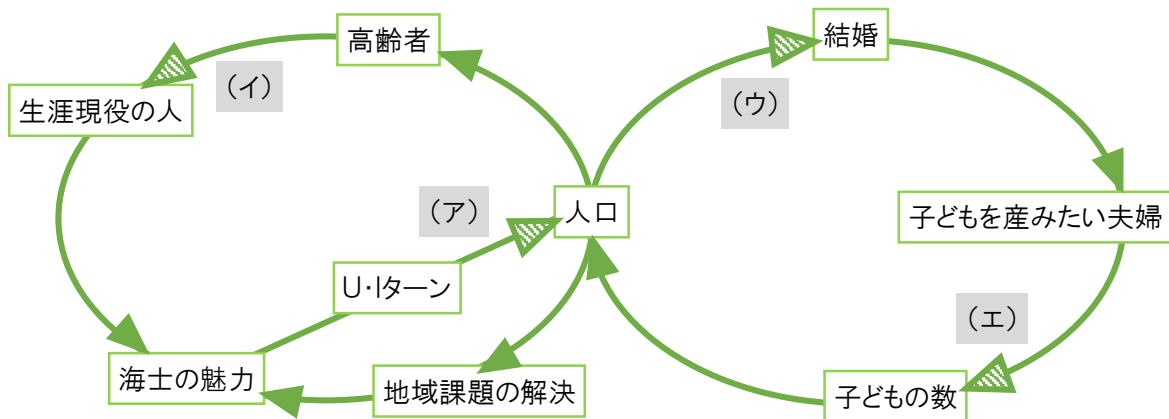
そして、理想の好循環を生み出すための取組(チャレンジプラン)を実行することにより「輝きの連鎖」を実現していく。

チャレンジプラン I

⇒ だれもが地域に愛着を持ち、生き生きと暮らせる交流豊かなまちづくり

【方向性（チャレンジビジョン）】

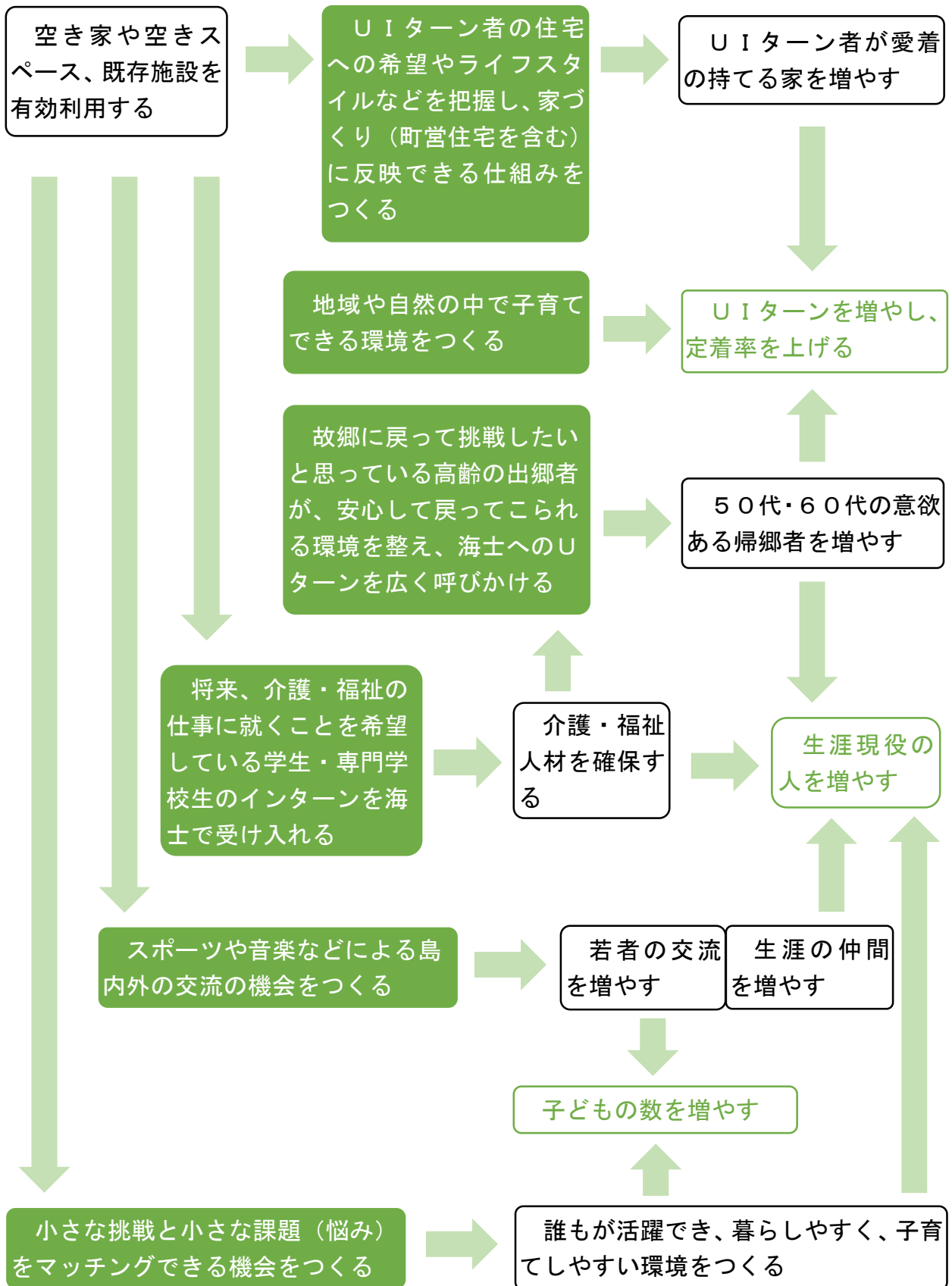
- 海土の魅力(祭りなどの伝統文化や豊かな自然・暮らし)を通じて、海土への愛着を高め、Uターンを増やすことにより、地域の課題を地域の魅力に変えていく挑戦をこれからも続けていく。
- 子どもからお年寄りまで年齢や性別に関係なく、それぞれが役割を持って活躍できる環境をつくり、笑顔の子どもや生涯現役の高齢者、輝く男性・女性を増やす。
- 男女の出会いの場や、地域の人とともに子育てできる環境をつくることにより、まちの将来を担う子どもの数を増やす。



【課題（チャレンジポイント）】

- Uターン者にとって、住宅の新築やリフォームは資金の面などでハードルが高い。一方で、町営住宅は画一的で住居者の希望やライフスタイルに合っておらず、住んでいる家に愛着を持ちづらい。(ア)
- 海土に戻って第二の人生に挑戦をしたいと考えている出郷者は少なくなく、一次産業や福祉の新たな担い手として期待されるが、住宅の問題や老後の不安から海土に戻って来られない人がある。また、受け入れるにも、体験住宅や研修施設などが不足しており、受け入れ体制が十分に整っていない。(イ)
- 普段の暮らしの中では、地域や職場などの中での人間関係で閉じてしまいがちであり、Uターンや地元住民の交流の場が少なく、出会いや身近な悩み・小さな挑戦を話し合う機会が少ない。(ア・ウ)
- 社会環境の変化により地域ぐるみで子育てできる場が減ってきている。(ア・エ)

【取組（チャレンジプロジェクト）】

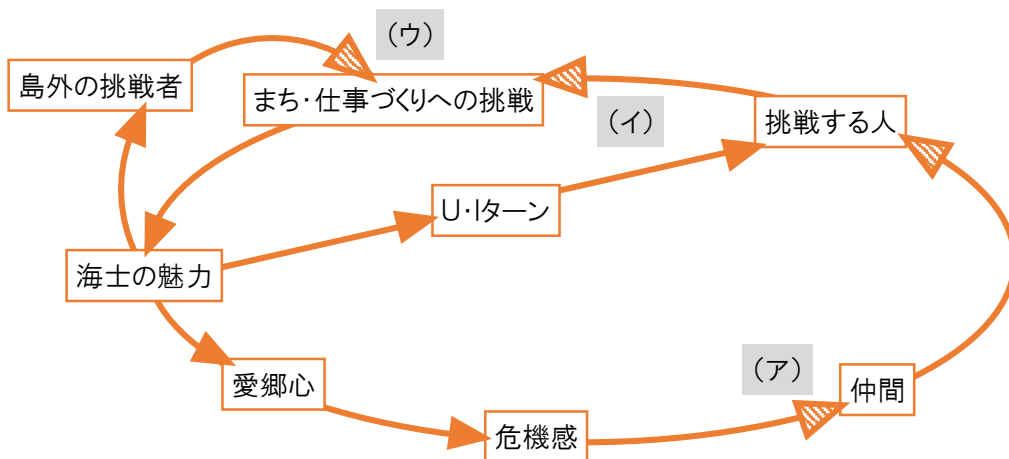


チャレンジプランⅡ

⇒ 魅力ある海士のために挑戦するひとづくり

【方向性（チャレンジビジョン）】

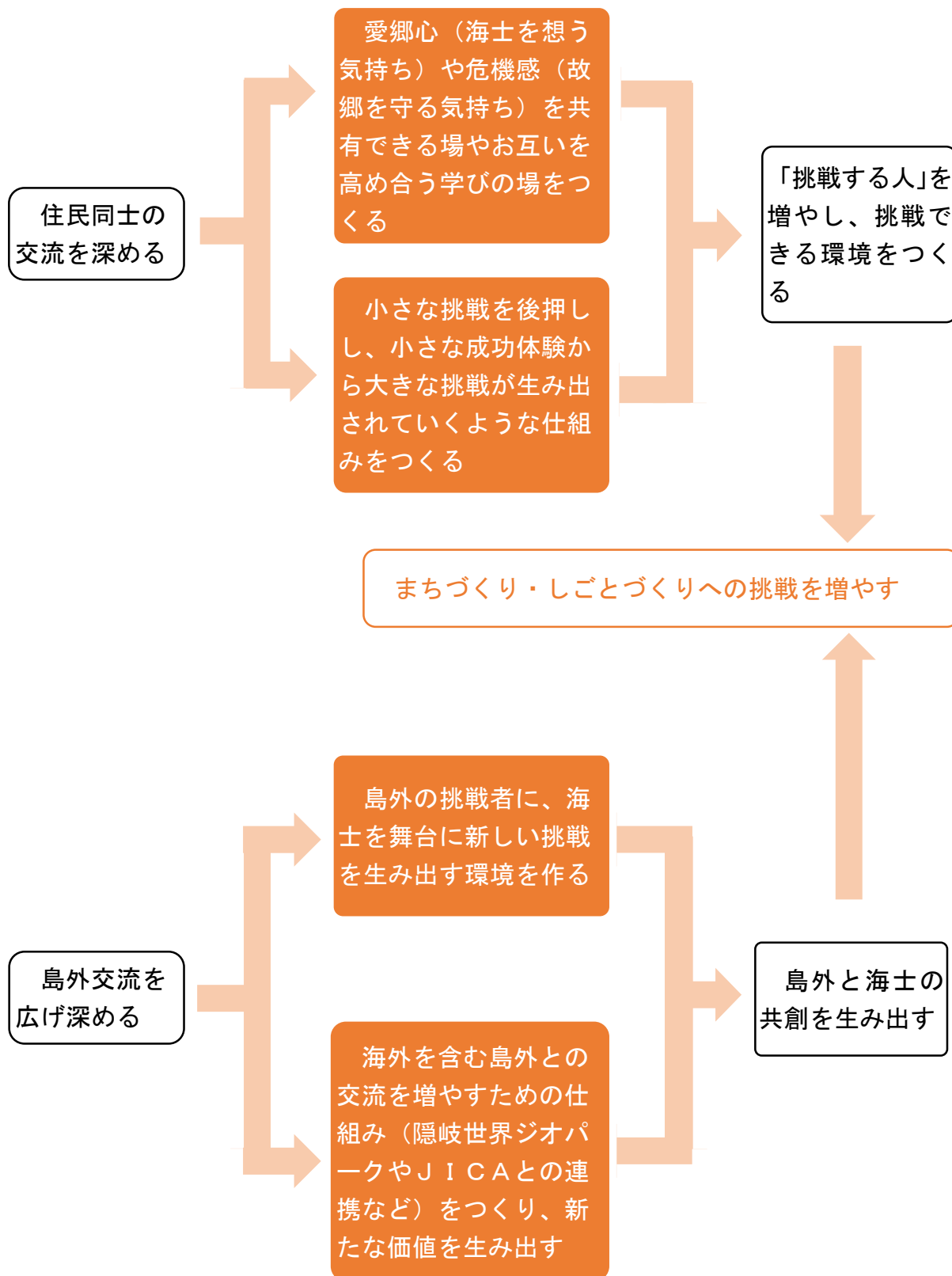
- 海士町への想い(愛郷心や課題意識など)を共有できる場を通じて仲間をつくり、まちづくりや仕事づくりに挑戦できる人を増やす。
- 島外(グローバル)との積極的な交流や地域資源(ローカル)を活用した学びを通じて、地域への愛着を持ち、広い視点で地域課題の解決に向けた取組を行えるグローバル人材を育成する。
- 限りなき挑戦から生まれる海士の魅力によって、意欲あるUターンや、島外から海士の挑戦を応援・サポートしてくれる人を増やす。



【課題（チャレンジポイント）】

- かつては、青年団が愛郷心(海士を想う気持ち)や危機感(故郷を守る気持ち)を共有する場として存在し、地域課題に挑戦するための仲間づくりの機能を果たしていたが、現在では、そのような場がない。(ア)
- 意欲あるUターン者が島に来たときや、島から出た子ども達(島前高校の卒業生)が将来島に戻ってきたときに、創業・継業するための受け皿や応援する機能が分散している。(イ)
- 創業・継業する際に、イノベーション(新たな価値の創造)を生み出すきっかけとなる島外交流についても、海外交流を含め、もっと増やしていく必要がある。(イ)
- 海士で新しい挑戦を始めたいと考えている島外の挑戦者が、島内の挑戦者や地域資源との交わりの中で、その力を十分に発揮できる舞台が必要である。(ウ)

【取組（チャレンジプロジェクト）】

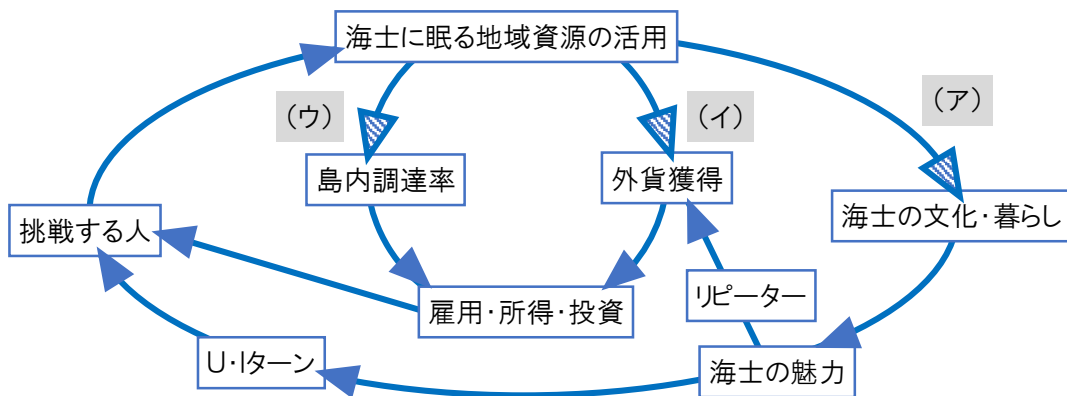


チャレンジプランⅢ

⇒ 地域の資源を生かし自立を目指すしごとづくり

【方向性（チャレンジビジョン）】

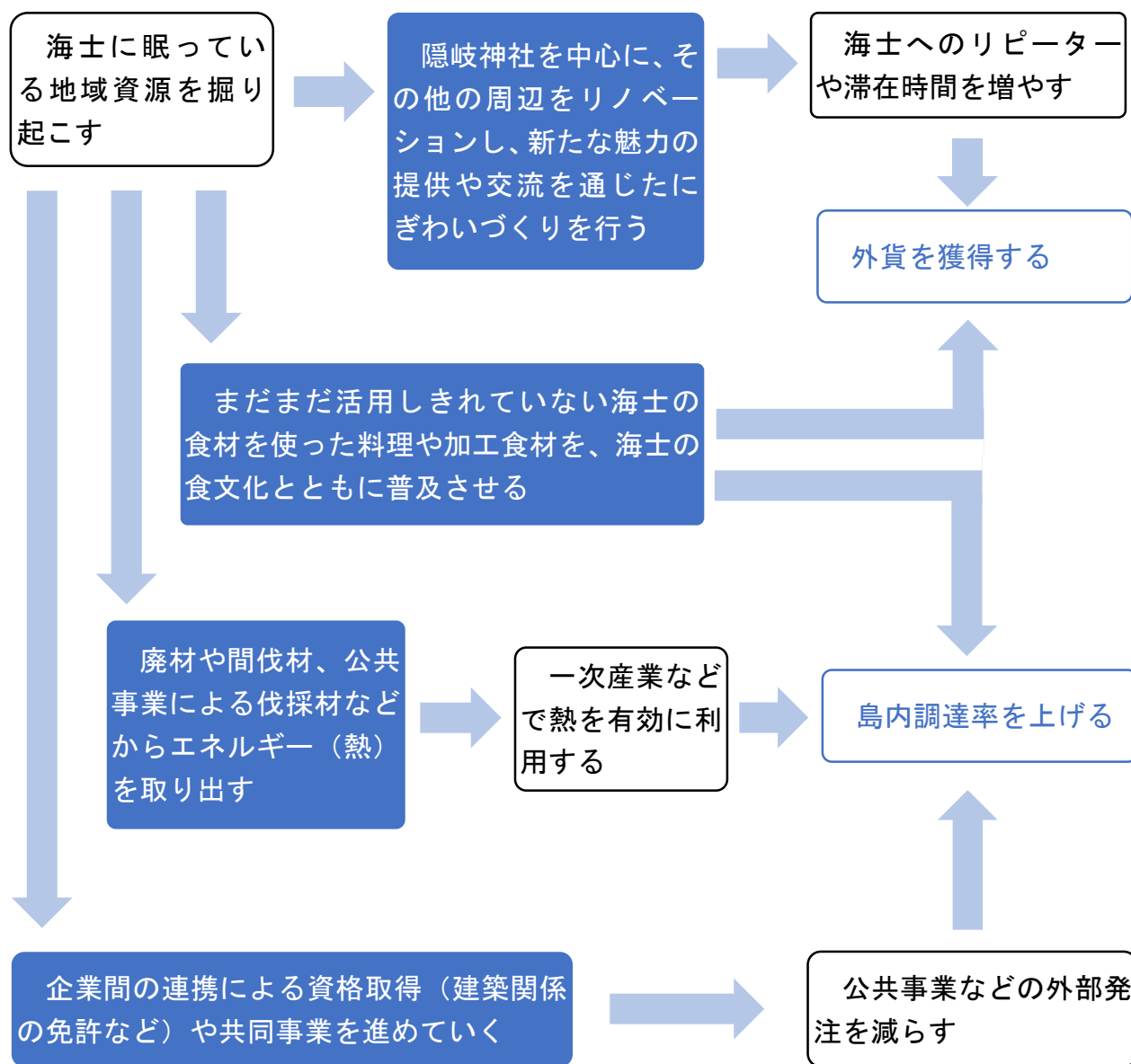
- 海士に眠る地域資源(未活用の食材や廃材など)を活用し、雇用・投資・所得の向上に繋げる。
- 古くから海士にある文化・観光資源を更に磨いて発信することで、リピーターを増やし、外貨獲得に繋げるとともに、海士の魅力の源である文化・暮らしを継承していく。
- 島内で働いている人の能力を最大限発揮できるような取組(資格取得の推進など)を行い、企業間で連携することで、島外に出ていく仕事を呼び戻す



【課題（チャレンジポイント）】

- 農業や漁業の担い手の高齢化により、これまで継承されてきた魅力ある海士の食文化が喪失してしまう恐れがある。(ア)
- 隠岐神社などの観光名所の魅力発信や海士の魅力である人との交流が十分にできていないことから、リピーターや長期滞在の観光客の獲得に繋がっていない。(ア)
- 地元産品の地消率や利益率はまだまだ低く、農家や漁師の手取りは不十分である一方、小魚や傷のある野菜などのいわゆるハネモノ食材は未利用のままであったり、付加価値を高めることのできる食材がまだまだ残っている。また、熱源として利用可能な木質チップも未利用のまま放置されている。(イ・ウ)
- 島内事業者が持っている資格・免許の種別や数などが不足しているため、公共事業の受注が島外に出ている。また、役場における公共事業の発注方法が画一的で、不必要に公共事業の受注が島外に出ている。(ウ)

【取組（チャレンジプロジェクト）】



「あすあまチャレンジ」への道

はじめに

私たちは、あすあまチャレンジプランを作成するにあたり、プロセス（過程）を大切にしてきました。なぜ大切にしてきたのか、どのようなプロセスをたどって来たのか、何が生み出されたのかをここで説明します。

1. 「明日の海士をつくる会」結成の背景

海士町では『最後尾から最先端へ』を合い言葉に、島の自立に向けて一次産業を中心とした雇用創出や隠岐島前高校の存続に向けた魅力化プロジェクトなど、数多くの取り組みに挑戦してきました。その挑戦する姿が島の魅力と輝きに繋がり、多くのUターンを生む結果にも繋がっています。

しかし私たち若い世代からは、「これ以上何をがんばるのか？」「次をどうすれば良いのかわからない」など、不安と迷いの声も出ており、まちづくりの世代交代も迫る中、このままでは輝きの連鎖が止まってしまうのではないかという危機感も出始めていました。

これまでの海士町のまちづくりは、『このままでは無人島になってしまう』という強い危機感や想いのもと進められてきたものですが、次世代を担う私たち自身がいつまでも先人に頼ってばかりでは輝きの連鎖は生まれません。

今回、国の地方創生の動きを受け、海士町の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を考えるための住民参加型会議として、「明日の海士をつくる会」が結成されました。「20～40歳代の男女で策定する戦略を自ら成し遂げたいという強い思いを持つ者」という海士町の募集を受け、私たちメンバーは様々な想いを胸に参加を決めました。

町の委嘱を受けた私たちは「あすあまチャレンジプラン」として計画をつくりました。計画はゴールではなくスタートであり、私たち自身が変わること、当事者意識を持ち、地域の課題解決に向けて仲間と共に自らが挑戦していくことこそが、輝きの連鎖をつくり出し、今後の海士町の地方創生に繋がるものと信じています。



2. メンバー構成

青山敦士、阿部裕志（事務局）、宇野将之、岡部有美子（事務局）、柏谷猛
片桐一彦、木村理恵、豊田庄吾、寺田理弘、波多誠、藤澤裕介
中川覚敬（事務局）、中畑満（副会長）、濱中香理（事務局長）、原孝平
飯古晴二（会長）、藤田諭、万代忍、武藤文（副会長）、渡辺祐一郎（事務局）

※ 民間11名（漁業・農業・飲食・建設建築・教育・福祉など）、役場9名
※ 1ターン10名

アドバイザー：枝廣淳子（東京都市大学教授）

記 録：田中輝美（ローカルジャーナリスト）

相 談 役：吉元操（役場総務課課長）

3. 「明日の海士をつくる会」（通称「あすあま」）の名前とロゴの由来

<名前の由来>

「明日の海士をつくる会」の「あす」には未来を示す明日という意味と、英語の us（私たち）をかけ、「私たちが海士の未来をつくるんだ！」という想いがこめられています。また、親しみをもちやすいよう通称名を「あすあま」としました。

<ロゴの由来>

先輩方からのバトンを受け継ぎ、私たちが今の海士町を担い、やがて次世代へ受け渡すという意味を込めて、「過去・現在・未来」のつながりの象徴として、三郎岩（海士町近くの海に兄弟のように並ぶ大・中・小の3つの奇岩。大きい方から「太郎・次郎・三郎」と呼ばれ、地元の人たちに親しまれています。）をモチーフにロゴを作成しました。



4. あすあまの進行プロセス

(1) チームづくり

お互いの海士への想いを共有し、チーム名をみんなで決めることにより、一体感を高めました。



(2) ありたい未来を描く

現状に縛られることなく、ありたい未来の姿を考える『バックキャストिंग』という手法で、2050年の目指すべき海士の姿を描きました。



(3) つながりの構造を見つける

海士町の未来に影響を与える要因を考え、そのつながりを見える化した『ループ図』を作成しながら、好循環を生み出すまちづくりのあり方を議論しました。目の前の問題にとらわれず、過去から現在、未来という時間軸で、その問題を作り出している構造を見つけました。



(4) どこに取り組むべきかを探す

様々な視点で 30 を超えるループ図を作成しながら、好循環をつくりだすための取り組むべきポイント（レバレッジポイント）について議論しました。



(5) 具体的なプロジェクトをつくる

自分が取り組むべきレバレッジポイントを仲間と共に具体的なプロジェクトにしていきました。その時に、あすあまで練り上げたり、課題把握のために、高校生やプロジェクトに関係する住民などにヒアリングを実施しました。



5. あすあまの進め方

- あすあまの全体会議を、月2回・1回4時間程度のペースで合計13回実施しました。この他に、プロジェクトチームごとに会議を重ねました。
- メンバーの問題意識である「継ぐ」「巻き込む」「海士らしさ」を他の地域の取組を通して学び考えるため、大分県由布市と熊本県南小国町を訪問し、意見交換を行いました。
- 会議のプロセスをデザインするためのアドバイスを枝廣淳子氏から得ることで、自分たちの手で計画をつくりながら、プロセスを進める手法を自分たちのものにするきっかけができました。
- 毎回の会議ごとに議事録作成や写真撮影による記録をしっかりと残すことで、議論を深めるとともに、計画づくりのプロセスを外部や次世代に伝えられるようにしました。

6. あすあまを通じて生み出されたもの

このプロセスを経て、理想の海士をつくるためにメンバーひとりひとりが挑戦に向かっていくための「あすあまチャレンジプラン」をつくることができましたが、何よりの成果は、多様なメンバーによる長時間にわたる議論を通じて、それぞれが抱える課題や悩みを共有し、お互いに刺激と気づきを得ながら、挑戦を応援しあえる信頼関係が構築できたことです。

おわりに

計画づくりで終わらず、行動していくこと。これが、あすあまの初回から最終回まで一貫して、メンバーで確認を続けてきたことでした。チャレンジプラン提出後も、行動をし続け、2050年のありたい海士の姿を自ら実現していきます。



あすあまの活動記録

月日	時間	行事	内容
3月5日	18:30 ~21:30	第1回会議	委員任命・自己紹介
3月22日	16:00 ~19:00	第2回会議	会の命名・海士のこれからで自分が気になっていることと/自分のできることの共有
4月10日	18:30 ~22:30	第3回会議	「ダイナミック未来思考プロセス」で海士町の未来を考える・人口モデルシュミレーション
4月27日	18:30 ~22:30	第4回会議	ビジョン「2050年のありたい海士」づくり①・いまに至る海士を知る（吉元課長講話「無人島にならないために」）
5月12日	18:30 ~22:30	第5回会議	ビジョン「2050年のありたい海士」づくり②・自分ができそうなことを考える・視察先の勉強
5月22日 ~5月24日	2泊3日	第6回会議	視察合宿（大分県由布市・熊本県南小国町）まちづくりの取り組みについて各まちメンバーと意見交換・移動中はメンバー全員の個々の思いなどの発表・共有
6月3日	18:30 ~22:30	第7回会議	視察の振り返りと報告・役場担当課長との意見交換
6月21日	16:00 ~20:00	第8回会議	ビジョン「2050年のありたい海士」づくり③・取り組む領域探し・他地域事例を学ぶ
7月5日	13:00 ~17:00	第9回会議	ありたい海士を実現する好循環（ループ）を生むための具体的なプロジェクトを考える①
7月19日	16:00 ~20:00	第10回会議	ありたい海士を実現する好循環（ループ）を生むための具体的なプロジェクトを考える②
8月8日 ~8月10日		プロジェクト 相談	各プロジェクトについて枝廣氏との個別相談
8月31日	18:30 ~22:30	第11回会議	各自プロジェクト発表と意見交換・あすあまチャレンジプランの確認・あすあまの継続について
9月13日	18:30 ~22:30	第12回会議	あすあまチャレンジプランの確認・産業文化祭での発表・あすあまの継続について
9月27日	18:30 ~22:30	第13回会議	町長へあすあまチャレンジプラン提出・各自の意気込み発表